

論文

美術商山中商会

——海外進出以前の活動をめぐって——

山 本 真紗子*

1 はじめに

「山中商会」とは、明治後期から戦前まで、大阪にある本店のほか、ニューヨークやボストン、ロンドンに支店をもち、とくにイギリスでは英国王室御用達（ロイヤル・ワラント）の称号をえた美術商である。当時のイギリスやアメリカは、ジャポニズムの流行はしだいに衰退していったものの、個人コレクション・公的コレクションの対象として日本美術の需要は高く、豊富になった資料をもとに学術的研究も進展した時代であり、山中商会は日本美術をはじめとした東洋美術品の流通へ寄与したことから現在でも国内外でその名を記憶されている。こうしたことから、先行研究も富田昇による中国文物の「流出」問題という視点からのアプローチ¹、あるいは門田園子・小熊佐智子らの欧米の市場への進出に関する分析²の二つに大別される。

パリ万博に参加した起立工商会社や、パリを拠点に活動した林忠正、明治38（1905）年創業の東洋美術商「繭山龍泉堂」などと山中商会との違いは、そもそも山中家は数代続いた茶道具商として活動していたことにある。山中商会は海外進出したのちも茶道具商としての活動を継続しており、近世から近代への「美術」概念の変遷もふまえ、時代と社会の変化に対応しつつ活動をおこなっていた存在であるといえる。その中心人物山中吉郎兵衛（弘化2〔1845〕年～大正6〔1917〕年）は早くから海外へ目をむける必要性を感じており、山中家はその若い世代を海外へ派遣、結果、吉郎兵衛の（義理の）甥山中定次郎（慶応2〔1865〕年～昭和11〔1936〕年）により山中商会は欧米圏および中国大陸への進出をはたした。

山中定次郎の死後まとめられた伝記が長く山中商会についてまとめた資料であったため、山中商会への評価と山中定次郎への評価がほぼイコールとして見られているきらいがある。山中定次郎の伝記には、死後すぐにまとめられた『山中定次郎翁伝』³のほか、桑原住雄「世界一の東洋古美術商 山中商会盛衰記」⁴がある。そこでは、定次郎および定次郎社長時代の山中商会は海外進出を果たしもっとも成功した美術商の一つであり、国内外で東洋（古）美術の紹介につとめたと評価されている。とくに桑原は山中定次郎が生きた時代に注目し、日本の近代ナショナリズムを背景に山中商会の事業が発展、定次郎の行動や考え方にも影響を与えたと論文中でたびたび言及している。近年発表されたものとしては、同業者である川島公之の手によるもの⁵があるが、短編ということもあり、前述の二編の記すところを大きく逸脱するものではない。確かに定次郎は山中商会の海外への進出の現場で活躍し、商会のもっとも華々しい時代をになった人物である。しかし、彼が山中商会の社長となったのは、彼が53歳のときであり、それ以前には吉郎兵衛が社長としての任を果たしていた。吉郎兵衛は当時春海藤次郎・戸田弥七とともに「大阪道具界の三傑」とも称された斯界の重鎮であり、定次郎にとっては単なる同族・同業の先達にとどまらない人物であるといえよう。さらに、定次郎が国外での商業活動をおこなう前に、すでに吉郎兵衛を中心に時代・社会の変化への対応を試行していたと思われる、こうした活動がその後の山中商会の土台を形成したと思われる。山中商会の評価を検討する上で、山中吉郎兵衛の社長在任時代の山中家の行跡および関西を中心とした山中商会の活動をあきらかにすることは、とくに当時の国内での山中商会の立場を明確にするためには不可欠な作業である。

本稿では前述のような立場から、まず、山中商会の会社としての変遷をあきらかにしたうえで、とくに大正7年までのいわば吉郎兵衛時代の活動にスポットをあてる。先に山中家の簡単な来歴、および山中商会が会社組織とな

キーワード：山中商会、美術商、明治時代、日本美術、京都

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2005年度入学 表象領域

る時期の登記資料を中心に、山中家がいかに山中商会をつくりあげたかを確認する。その後、吉郎兵衛の時代に焦点をあて、当該期の活動が山中商会の目指した方向性やその後の展開にあたえた影響を考察したい。

1 山中商会以前の山中家

近代以前の山中家の記録として、大阪天満宮に二代目山中吉兵衛（文化3〔1806〕年～明治5〔1872〕年）の名が確認されている⁶。初代山中吉兵衛（明和4〔1767〕年～文政10〔1827〕年）は伊丹から大阪へ出て天満大工町で経師屋を開業したとされ、三代目吉兵衛は明治期に長く大阪天満宮の氏子総代を務めた。現在も大阪天満宮の本殿前には戦前、高麗橋一丁目の山中商会本社玄関前にあった白大理石の狛犬がすえられている⁷。

中村作次郎『好古堂一家言』⁸の記述も、山中吉郎兵衛の先代（二代目）吉兵衛は経師屋であったとする。本来の商売のかたわら書画骨董をなりわいとしはじめ、彼の長男（三代目）吉兵衛は天満におり天山、次男吉郎兵衛は北浜の角の店のため角山、娘にむかえた養子、與七は高麗橋一丁目に住んだため高山と称した。

この三人のうち、もっとも世に名をしられたのが次男山中吉郎兵衛であろう。「山中春篁堂」として明治・大正の大茶人との交際や取引をおこない、高橋箒庵『萬象録』などにもその名は登場する⁹。『角山箒篁翁薦事図録』は吉郎兵衛3回忌時の陳列の記録であるが、その巻末には「山中箒篁翁小伝」がある。それによると吉郎兵衛は弘化3（1846）年12月12日生まれで、幼名は岩次郎。明治15（1882）年高麗橋で店舗を開いたという。

その後は、二十代のころ川崎正蔵に本願寺伝来顔輝筆寒山拾得二幅対を八百円でおさめた¹⁰とのエピソードに象徴されるように、当時のコレクターとの取引も盛んにおこない、また平瀬家蔵器入札では晴海・戸田らとのぎをけずるなど、多くの入札の札元もつとめた。また大阪美術倶楽部には明治43（1910）年の創設時より取締役の一人として参加した。

とくに入札に関しては、現存している売立目録¹¹記載の札元として明治40（1907）年～大正6（1917）年までに名が出ているものだけで60点弱ある。西本願寺入札会（大正2年11月7日）のように、大規模で複数の札元がいるような、『近世道具移動史』中の主要な入札のほとんどに札元として名があげられていることから、実際にはこれ以上の数の入札にかかわっていたといえる。

また「山中箒篁堂」は煎茶の世界でも知られており、『青湾茗醺図誌』4冊は明治7（1874）年11月に催された青湾茶会の、『澱江茗醺図録』¹²は明治41年の山中箒篁翁四回忌の供養をかねて網島澱江でおこなわれた煎茶会の、大正11（1922）年『角山箒篁翁薦事図録』¹³は大正6年没の吉郎兵衛の三回忌にあわせおこなわれた煎茶会の図録である。そのほか山中吉郎兵衛がかかわった書籍として、『模様雛形都乃錦』¹⁴、『模様雛形難波乃梅』¹⁵がある。

以上、山中家は明治～大正期の茶道界、および茶道具界に一定の地位を築いた。そして山中商会が合名会社、そして株式会社化し、また海外支店の拡大をおこなうのは、この山中吉郎兵衛が社長の時代である。次に、企業としての山中商会の変遷を確認していこう。

2 山中商会の概要

次に、商工名鑑類の記載をもとに、企業としての山中商会の変遷を確認していく。山中商会は、明治33（1900）年に合名会社化、大正7（1918）年に株式会社化した。

2-1 合名会社時代

まず合名会社化した当初の主要な構成者は以下の通りである¹⁶。

合名会社山中商會 <東區北濱二丁目・電話東一九七〇>

設立明治三十三年二月、營業ノ目的新古美術品並ニ雜貨輸出業、資本金拾五萬圓

社長 山中吉郎兵衛 東、北濱二

社員	山中吉兵衛	同、高麗橋三	同	山中與七	同、同一
相談役	松本重太郎	北、堂島濱二			
理事兼支配人	山中定次郎	同	山中繁次郎	同	山中六三郎
支配人	松井貞次郎	同	牛窪第二郎	同	森本銀太郎

◎支店 京都市上京区寺町通御池下ル

◎支店 米國紐育市ヒフスア (ママ) ペニュー二百五十四番

◎支店 米國ボストン市ボイルストンストリート二百七十二番

◎支店 米國アトランチック市スチールピーアブローク六番

◎支店 英國ロンドン市ニューボンドストリート六十八番

合名会社の社長には山中吉郎兵衛がつき、定次郎は理事兼支配人となっている。相談役の松本重太郎は、株式会社百三十銀行（東区高麗橋三丁目）頭取をはじめ、数々の銀行・企業の設立に参加し重役をつとめた実業家である。社員の住所や電話番号の変更・役職の異動などは多少みられるものの、上記が合名会社時代の山中商会の基本的なデータと考えてよい。ここには記載がないが、山中商会は明治33（1900）年大阪市北区福島二丁目に工芸品製作工場を新設、石川県工業学校長村上九郎作を工場長とし、百余人の作家をあつめて製品の生産を開始している。この工場は明治42（1909）年7月、大阪北区の大火により焼失し、以後この工場は廃止され再開されることはなかった。また、『役員録』明治44年版からは資本金が30万円に増額され、以降資本金は30万円となる。

次に、この時期の山中商会と関連のある企業をあげる。『役員録』明治40年改正版にのみ記載された「山中輸入合資会社」である。

山中輸入合資会社 <東区高麗橋一丁目・電話〔長〕東三四一〇>

設立明治三十八年七月、営業ノ目的機械其他雜貨輸出入販売、資本金參萬圓

代表社員 山中繁次郎 東、高麗橋一

同 松井貞次郎 南、長堀橋二

同 荒木和一 東、南久寶寺四

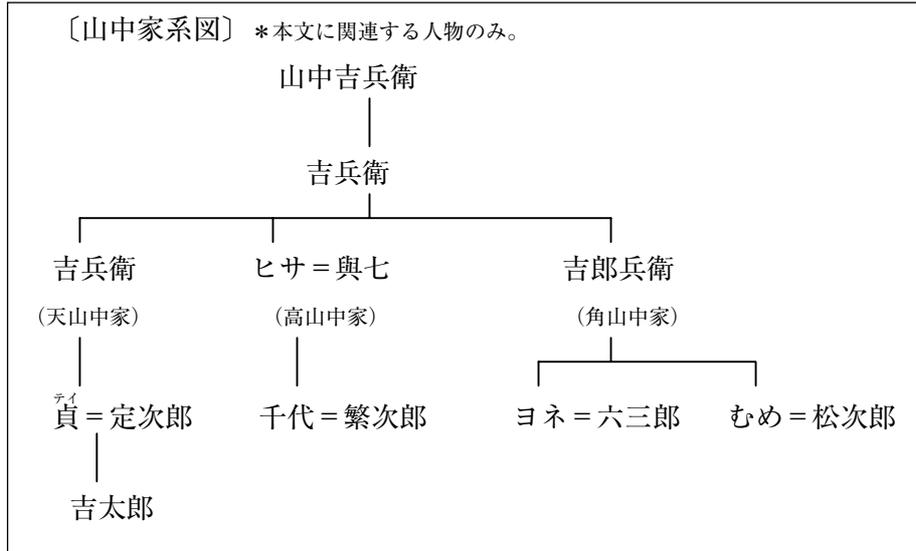
代表社員として、山中商会の理事・支配人の山中繁次郎・松井貞次郎の名がある。両者はともに山中一族であった。「機械」の指すものの詳細については現在解明できていないが、山中商会がこの時期何らかの新たな展開を準備していたものであろう。結果的にこの会社は存続させるほどの成果をあげえなかったらしく、『役員録』明治42年改正版には記載がない。

さらに大正5年2月には基礎が固まった京都支店を独立させ、山中松次郎（松治郎とも）を代表社員として山中合名会社を組織させた。（後述）¹⁷

また『役員録』と同種の資料として『大阪商工名録』の記述をあげておこう。『大阪商工名録』明治44年版では、「書画骨董其他古道具」の項に、山中吉郎兵衛、山中與七、山中吉兵衛が記載されている。彼らの営業税額は吉郎兵衛503円、與七327円、吉兵衛269円であった（記載順）。ちなみに同じく道具界三傑の谷松屋戸田弥七が236円、晴海藤次郎が145円となっている。

ここで、上記の記録に会社の役員として名前があがっている人物について確認しておく（系図1）。前述の通り、吉兵衛、吉郎兵衛、與七は二代目山中吉兵衛の男子である。彼らは明治30年代にはおおよそ50代と考えられ、山中商会の中枢をになう人々である。

山中定次郎は三代目吉兵衛長女テイの婿、山中六三郎は吉郎兵衛長女ヨネの婿、山中松治郎（明治8〔1875〕年生）は吉郎兵衛二女むめの婿¹⁸、山中繁次郎（明治元〔1868〕年生）は山中與七の長女千代の婿である。30代の彼ら若手はいずれも山中一族に娘婿としてむかえられている。こうしたありかたは、当主の子孫それぞれが家をおこしながらも、一族一体となって家をもり立てていった三井家のような江戸時代の商家を思いおこさせるだろう。株式



系図 1

会社へと移行したのちも、かれら山中一族は山中商会の中心にありつづけた。

2-2 株式会社時代

『役員録』の記載は、合名会社と株式会社を分類し掲載されている。山中商会も大正7年に株式会社化されたことをうけ、その後は株式会社に分類された¹⁹⁾。

株式会社山中商会 東區高麗橋一丁目 電話本局 一九七〇、一九七一

設立大正七年六月、営業ノ目的新古美術品其他輸出入賣買、資本金貳百萬圓、一株壹百圓、拂込高壹百五拾萬圓、諸積立金貳拾萬貳千五百圓

社長 山中定次郎 東、高麗橋三

営業取締役 山中繁次郎 同、内久寶寺二

取締役 山中松治郎 京都、下京、粟田口

同 森 太三郎 同、上京、御幸町三條上

監査役 山中吉郎兵衛 東、北濱二

同 青木喜太郎 東成郡天王寺村

支配人 谷口 宓 同上

□紐育支店 米國紐育市フヒフスアベニュー 支配人 白江信三

□倫敦支店 英國倫敦市ニューボンDstロリート 支配人 岡田友次

□堡斯頓支店 米國ボストン市ボイルストンストリート 支配人 八橋春通

□北京出張所 支那北京麻線胡同

□上海出張所 支那上海虻口南潯路

□東京出張所 日本橋區濱町一丁目

同時に「合資会社山中吉郎兵衛商店」（以降「吉郎兵衛商店」）が大坂府の合名会社の項に記載されるようになる。このことから、山中商会あるいは山中家のなかで、両者の役割を明確に分担し、海外支店の統括や貿易業務、それらに関連する国内事業に関しては株式会社山中商会が、江戸時代からの（茶）道具類に関する取り扱いについては

合資会社山中吉郎兵衛商店が担当するようになったのではないかと推測される。

合名会社 山中吉郎兵衛商店 東區北濱二丁目 電話本局一二〇一

設立大正七年八月、營業ノ目的書畫骨董類賣買、資本金參拾萬圓、諸積立金參萬九千五百圓、利益配當前期及前々期年五分

業務執行社員 山中吉郎兵衛 東、北濱二

なお、『大阪商工名録』大正7年版では山中吉郎兵衛の營業稅額が743円、山中吉兵衛が131円、山中與七が423円であった。

株式会社山中商会と合資会社山中吉郎兵衛商店の成立の契機となったのは、ひとつには山中吉郎兵衛の死亡によるものと考えられる。吉郎兵衛は大正6(1917)年春より腸をわずらい8月より京都栗田の山中合名会社内別邸に移り療養中のところ、胃潰瘍を併発し同年12月25日午後2時に死亡した(享年72歳)²⁰。12月30日津村別院(北御堂)で葬式をとりおこない、大正7年より山中定次郎が山中商会の社長となる。おそらく、この段階で、一族・会社内部での話し合いをもち会社を分割することが決定されたと思われる。

さらに当時の茶道具市場は高橋義雄のいうところ「成金時期」にあった²¹。高橋は大正元(1912)年ごろより関西でも茶事が勃興し始め道具市場も活況を呈し始めたとした上で、大正5(1916)年5月16日仙台伊達家蔵器入札から同9(1920)年4月19日土井子爵蔵器入札までの期間を、成金ももっとも優勢であり、「彼等が大袈裟に道具を買収するに、其俗悪なる嗜好を以て色彩濃厚なる絵画、蒔絵物若くは堆朱の如き^(ママ)者^(ママ)を選び、此種の品類が一時突飛の相場を出したのも決して偶然の事ではない、」状況²²としている。とくに仙台伊達家の入札会は大大名の入札の嚆矢であるとされ、その後大名家が続々と道具の入札・売却をおこなった。大正6年には総売上高50万円以上の売立が5件、大正7年上半年にも近衛公爵家の入札の総売上額が125万円にのぼるなど、大売立が続き、取扱高など企業としてのありかたという点からも、山中商会の株式会社化、吉郎兵衛商店の合名会社組織化という体制が選択されたのであろう。成金時期そのものは長くは続かなかったものの当時の日本人のあいだで茶道および茶道具が評価されるようになり、市場としても一定の規模を形成・継続するようになったといえる。

山中商会の株式会社化・吉郎兵衛商店の合名会社による体制確立後、定次郎はジョージ5世より英国王室御用達を下賜され(大正8〔1919〕年)、さらに大正10年~11年、大正12年に続けて欧米を旅行し各地を視察、古美術品蒐集をおこなう(『定次郎伝』)。帰国後、「東洋古美術展」(大阪美術倶楽部・大正12年)「古代品美術展観」(大阪美術倶楽部・大正12年)などを皮切りに山中商会および定次郎が札元・主催となり海外美術品の展観を開催するようになる。一方、札元=山中吉郎兵衛による「〇〇家所蔵品入札」といった国内での美術品(茶道具類中心)の入札も従来どおり存続して開催されている。別のいいかたをするならば、定次郎=山中商会による展観は、前述の展観以降大正13(1924)年11月『埃及希臘波斯支那古代美術展観』(大阪美術倶楽部)はじめ海外から持ち帰った美術品の陳列展示が中心であり、日本国内の美術品であることを明確にうちだしているのは昭和8(1933)年12月の『時代屏風浮世絵琳派展覧会』をふくめ少数である。山中吉郎兵衛名義での入札では外国人所蔵品の入札は確認できるものの²³、山中商会のように海外美術品だけを扱った入札はおこなわなかったようだ²⁴。展観・入札での取り扱い品目を見ても、両者の業務の方向性が明確に区別されていることがわかる。

さらに大正10年からは合資会社山中商店が設立された。

合資会社山中商店 東區高麗橋一丁目 電話 本局一四五

設立大正十年七月、目的欧米貴金属寶石雜貨煙草化粧品販売、資本金拾万円

業務執行社員 山中吉太郎 東、高麗橋三

山中吉太郎(明治23〔1890〕年~昭和40〔1965〕年)は定次郎長男で、のち定次郎の跡目をつぐ²⁵。美術品以外の品々の取り扱いも開始し、総合的な貿易会社へと拡大しようとしていたのであろうか。同社の活動については現在

確認中である。

以上、明治期後半から大正期にかけての山中商会の会社としての変遷をたどった。山中商会は、合名会社設立時より、海外支店を設置、さらには場合・目的によっては別会社を立ちあげることもおこなった。こうした海外への進出、会社の発展の方法は、吉郎兵衛らをはじめとする国内・茶道具担当の親世代と、海外支店・海外向け商品を担当する子(婿)世代がそろったこの時期からはじめてとりくまれた試みではない。山中商会の活動の方向性を考えるには、さらに古い時代の活動にも目をむける必要があるのである。

3 美工商社の設立

東京の美術商中村作次郎は明治6(1873)年に吉郎兵衛(当時28歳)と出会い、「今後は是迄の茶道具屋のやうな範圍の狭い商売をしては面白くないから、一般の美術品を取扱はねばならぬ」「外人相手の商売をやらねばならぬ」という彼の言葉に感銘をうけたと自著の中で述べている²⁶。

こうした姿勢は、吉兵衛・吉郎兵衛・與七の三兄弟全員の共通認識になっていたと考えられる。明治27(1894)年ごろより次々と娘婿たちをアメリカに長期派遣し、海外支店を設立させたことも、そのあらわれであろう。明治27年山中定次郎、山中繁次郎が11月3日出航し渡米した際、山中吉兵衛兄弟三人が費用を供出したという。二人は日本美術品5万円相当を持って行き、ビゲロー、モース、フェノロサの助力・斡旋をえてニューヨーク支店を開設した。翌年から定次郎は現地のイーストマン商業学校に入学、明治32(1899)年にボストン支店、明治33(1900)年にはロンドン支店を開設し山中六三郎・富田熊作らを駐在させた。『定次郎伝』では、若き日の定次郎が英語学習に熱心にとりくんだことや、主家に黙って海外へ渡航しようと出奔騒ぎをおこしたことが書かれており、定次郎自身に元々海外への強い興味があり、それゆえに山中家に婿として迎えられたと考えられる。

そもそも書画骨董をあつかっていた彼らが海外への進出を本気で考え始めるようになるのはどういったきっかけによるものであったのであろうか。むろん、当時のめまぐるしい政治・社会の変化への対応の模索、また直接的には茶道具類の市場が低調であったという商売上の危機感などが彼らの胸のうちに存在していたはずである。

こうしたなかでのひとつのこころみが「美工商社」の設立であった。美工商社は明治19(1886)年6月15日に、陶器商錦光山宗兵衛、繡箔商井上徳三郎・田中利七、美術商林新助、ならびに神戸の商人池田宗兵衛、大阪の山中吉兵衛が発起人となって設立された²⁷。京都市真葛原に新築し、金銀銅器、陶器、漆器、織物、骨董をならべ、開店以来12月までに3,977円、翌1月より6月までに12,392円50銭の売り上げがあったという。その設立の目的は、「近年洋人の旧跡勝地を訪ひ古器名画を觀んとて来京する者日一日より多きを加ふるに至り亦来遊者は必ず珍奇の古器名産を購ひ販らざるもの稀なり」として、「外客が好んで需用する物品即ち金銀銅器陶器漆器織物繡箔骨董物の類を該社に陳列し以て外客の求めに応ぜん」²⁸というものであった。

他の発起人について確認していこう。栗田の陶器商錦光山宗兵衛は6代目(文政7〔1824〕～明治17〔1884〕)が慶応年間(1865～68)より外国貿易に着手し、明治3年には京薩摩の彩画法を開発、明治5年から神戸の商館とも取引開始、後年万博での表彰や日本政府からの輸出・生産額増加などに対する受賞も多い人物であり、7代目も先代につづき意匠や技術革新をはじめ輸出陶器の指導や京都陶界の統一に尽力した人物であった²⁹。

田中利七の家はもともと神官僧侶の装束法衣打敷等をあつかっていたが、先代利右衛門より海外貿易に力を注ぎ、安政年間から刺繍をほどこした屏風を長崎で販売、元治元年からは神戸からイギリスに輸送しはじめ成功をおさめていた。この刺繍屏風のほか天鷲絨友禅・押絵(奈良二月堂の乾漆仏像を参考にし、これを押絵に転化したものという)など斬新な商品を開発、とりあつかった人物である³⁰。

林新助(明治2〔1869〕生)は数代続く京都の美術商で、のちに京都美術倶楽部取締役をつとめるなど京都美術商界の中心的役割を果たした人物である。吉郎兵衛と同じく、主だった入札には札元として参加し大家に出入りしているほか、明治23年には明治天皇に円山応挙達磨幅を奉獻するなど、国内外の皇族・王族からの用命も多かった。林家もまた早くから海外進出の必要性を感じ、横浜神戸の居留外人へ特約売込をおこない、明治3年にはフランス「ボンマルシ商会」(パリ、ル・ボン・マルシェ百貨店を指すか)とも売込特約を結んだという³¹。

錦光山・田中はすでに海外貿易においては事業をある程度軌道にのせており、山中家にとっては、単に物品販売

上の便宜をえるというだけではなく、外国人との取引方法や顧客の嗜好についての実際を目の当たりにするという意味で、同社の設立への参加は意義があったといえる。さらに同業の林が参加していることは注目に値する。海外への進出は、当時の意欲的な美術商のとるべき道であった。

美工商社のような貿易会社は当時の京都でいくつも設立されている。とくに規模が大きかったと考えられるのが関西貿易合資会社で、明治20(1887)年5月17日に設立され³²浜岡光哲、山田定七、中村栄助らが出資、資本金10万円、三条御幸町西入に本社を、大阪、東京、名古屋ほか上海、ロンドン、マンチェスター、ニューヨークに支店や出張所をおき、京都商品を輸出、明治22(1889)年のパリ万博では日本中の出品物を一手に引き受けパリ進出をはかったが東京の会社に先をこされ実現できなかったという³³。明治34(1901)年5月に取引先の村井兄弟商会の両切煙草の思惑買いの焦げ付きや日清戦争後の反動不景気の影響により倒産した³⁴。

京都製品の輸出を目的とするところでは、代表的なのは錦光山らの陶磁器界で、明治20年には京都最初の工場システムに基づく製陶工場をもつ京都陶器会社³⁵や幹山伝七による幹山陶器会社³⁶が設立されている。明治28年には池田清助が新門前通梅本町に「新古美術工芸品販売」を目的とした池田合名会社を設立した³⁷。池田は明治7年に神戸居留地36番館に店舗開設、英国人2名を書記として雇用し、さらに明治9年には店員を、同14年には長子清右衛門(のち清助)夫妻をロンドンに派遣して店舗をひらかせるなど、海外への志向が強い人物であった。

貿易商から美術商へという当時の流れについては佐藤道信氏による先行研究内での指摘がある³⁸。佐藤氏は東京では、良質の当代輸出美術の振興もその目的のひとつとして輸出による富国のため龍池会(のち日本美術協会)が組織されたとし、その流通・販売をささえ需要地の嗜好を反映させた生産部門をもち活動していたのが貿易商・美術商であると指摘した。関西においても東京と同様の動きがあったと考えられるが、京都の場合はとくに西陣・陶磁器生産を中心に地場産業とのかかわりが強いところが特徴だろう。それは西陣の織物業や染色業、陶磁器、漆器、扇子、団扇など、手工業を中心とした京都の伝統的な産業が輸出振興にむけて技術革新や業界の組織化をすすめた時期と重なる。とくに当時の京都の輸出陶磁器は、明治初期に好調に増加した人気・輸出高が明治16年ごろには減少傾向になり、その回復を目指す段階であった³⁹。

美工商社の活動は京都府勸業統計によると明治22年の記録を最後に記載がなくなるため、その前後には解散したようだ。解散の原因は現在確定できていないが、錦光山ら陶磁器産業で別の会社がたちあげられていることもあり、経営上の失策以外にも、経営上の方針や運営上の方法での齟齬が生じたための解散である可能性がある。池田合名会社はじめ、同時期の同種の会社も長期存続したものは少なく、過渡期的状況がうかがえるであろう。また、錦光山ら当代美術の生産・販売業者と一緒に会社を設立したことや、従来山中家があつてきたであろう、いわゆる書画骨董類やその価値を下支えした茶道の不調などの状況を考慮すると、山中家が美工商社時代に積極的に当代美術の販売への関与を始めたのではないかという推測が可能であろう。その後の山中家(商会)は、陶磁器などの京阪の地場産業の生産者や経営者によって設立された会社と共同で活動するのではなく、一族で組織された会社に結束して活動することを選択し、大阪工場での家具生産など独自の製品生産・販売を開始、そうした製品の海外への輸出も同社のなかで重要な位置を占めた。また、国内でも外国人相手に国内産業の製品および美術品を売買するという試みは、以降もつづけられていくのである。

4 外国人の来京

こうした貿易会社・関連会社の設立の背景には、海外輸出を奨励する日本政府の政策もあるが、京都においては多数の外国人の来京も忘れてはならない。

たとえば、高島屋では明治9(1876)年3月神戸居留地のアメリカ人スミス・バーカーの来店以降、外国人の来店・商談が絶えず、翌10年11月からは縫師を雇用し外国人向け商品として刺繍の製作を開始している。しだいに取り扱いの品目も増やし、明治26(1893)年6月1日には従来の店舗(呉服店)の東側に専門の貿易店をもうけるにいたっている⁴⁰。

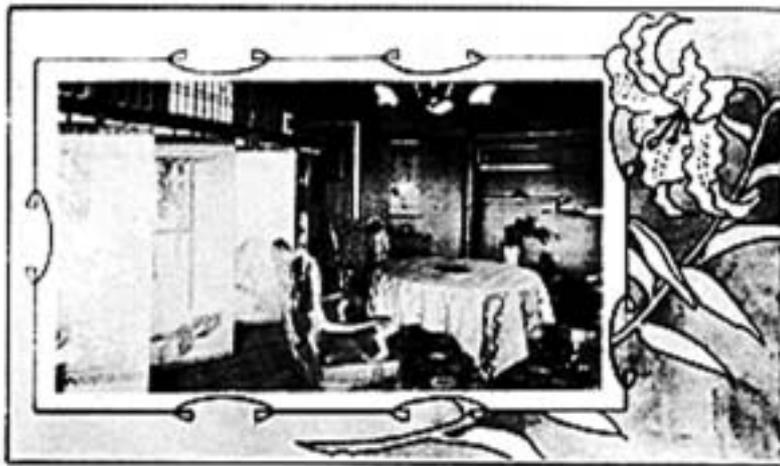
明治24(1891)年山中吉郎兵衛はロシア皇太子ニコライ・アレクサンドロウィッチおよびギリシャ王国ゲオルギオス王子(ジョージ王子)の来日時京都の宿泊所「常盤ホテル」(河原町二条下る、現・京都ホテル)の装飾を林新助

と共同で担当している。

露国皇太子殿下の御旅館なる常盤「ホテル」は来る二十五日を以て装飾向き等全く手放れと為す筈にて、目下取り急ぎ準備中の由なるが、窓掛け、テーブル掛け等織物に属するものは飯田新七、西村総左衛門両氏に於いて引受け、陶磁器・漆器等器具類などは並川靖之、紹美栄助、錦光山宗兵衛の三氏之れを引受け専ら我が国美術品のみを陳列する筈にて、飾付万端は山中吉郎兵衛、林新介の両氏が担当する趣き。(『京都日出新聞』明治24年4月22日記事、下線部引用者、以下同)

具体的な装飾方法は不明だが、「テーブル掛」など西洋風の室内装飾品が用いられており、洋室や洋風の装飾に日本の美術品を当てはめるといって一種独特な装飾のありさまがうかがえる。

のちイギリス・コンノート王子の来京に際しても山中商会がホテル内の装飾を担当した。(資料1)



コンノート殿下の御居間と御寝室

資料1 『都ホテル100年史』 p22より転載

貴賓御旅館の設備 本日御来京あらせらるべき英国コンノート親王殿下の入らせらるべき御旅館都ホテルの設備のさまを記しまつれば御居室、喫煙室、談話室、食堂の装飾は山中商店^(ママ)之に当り其の他はホテル自身之に従事し昨日夫々手を分ちて準備中なり (以下略)

▲殿下の御居室 (中略) 此の御居室の装飾の概略を記せば日本造の室なれば南方に一間の本床と之に続ける

一間の本床と之に続ける一間の違棚あり床には安永丙申冬応挙写と落款ある絹地老松の下白鶴清涙をよへば旭日瞳々たる図の幅をかけ其の前に豊公時代梨地蒔絵冠卓を置き卓の上段に白玉遊環附金火屋附の香爐下段には堆朱梅模様深彫の香合を置きたり之に続ける違棚の上段には菱川師宣筆極彩色四季遊宴の図の巻物三巻を唐物の軸盆の上に置きたると五十嵐道甫作平日梨地山吹蒔絵の硯箱とを並べ下段には黒卓の上に青磁耳附の花瓶と古銅寿老の置物とを並べたと盆栽を置きたり（花瓶は床の間に置くが普通なれど床の間狭き為め此處へ置きたるなれど）中央には円卓を置き卓掩は牡丹模様能衣裳地厚板を掛け桑の彫刻の椅子之を囲めるが南面して置かれたる殿下の召させらるゝは龍の彫刻あり金唐皮を張りたるものなり、床の間前には暖爐あり、室の北隅の左右には白木の卓と大姿見とあり姿見の棚には蒔絵小箱等を飾り竹に雀模様の帷を引きたるが殿下若し起たせ給ひ此の帷を開き給はんには紫を引く比叡続きの山々より洛陽北東部の光景は倏忽御一眸の中に集まり来たらんなり、又室の左右には狩野永徳筆種々の花見小袖掛け列ねある図の余地誰袖の絵の屏風一雙と西村仁兵衛氏所蔵狩野山楽筆菊と萩の垣もたわゝに咲ける金砂子地屏風一雙とを敷きたるが室の中央には花形の電燈三個夜は粲然として光を放つべきなり、(中略)

▲山中商会と装飾 本日の御来京は唯御一泊のみなれば前記の装飾に止りたるが明月御来京の際は同商店にて足利飾、徳川飾、抹茶飾、煎茶飾と毎日御装飾を変更するか或は五節句飾を毎日変ふるか何れにしても善美を尽す趣向に内定し居れりといふ（いずれも『京都日出新聞』明治39年〔1906〕2月28日記事より）

こちら、洋室のなかに和洋の美術品を混合して装飾するという形にはかわりがない。「足利飾」「徳川飾」など毎日の飾りの違いの演出は、茶道にも明るい山中商会の得意とするところであったろう⁴¹。

このような客室内での装飾も含め、ホテルは当時の美術品販売の重要拠点のひとつであった。たとえば、貿易商・通弁が中心となり也阿弥ホテル楼・京都ホテルの出資を得て明治31年（1898）3月弁天合資会社を設立し、ホテルに滞在する外国人への営業を独占しようとした⁴²。同時期には株式会社京都美術倶楽部が明治41（1908）年に設立された⁴³ほか、美術品売買を目的とする合資会社巴商会⁴⁴、合資会社三笠商店⁴⁵、合資会社植西令古堂⁴⁶、高田合名会社⁴⁷が次々と京都市内で設立されている。

そして、こうした市内の状況をふまえつつ、京都を訪れる海外からの顧客に対応するための山中商会の支店が京都支店だったと考えたい。もともと山中商会支店は上京区寺町通御池下るにあったが⁴⁸、前述したように、明治38年東山の粟田口三条坊町一四に移転、大正5年2月に山中合資会社として独立した。同社の開設披露は三日間おこなわれ、府知事はじめ貴族議員、衆議院議員、市長、府・市議員ほか鴻池・住友・三井等の顧客らが縦覧した⁴⁹。同社の建築は日本風三階建てでそのなかで和洋風室内装飾、古書画展覧、煎茶、陶器、彫刻、銅器、服飾などが観覧に供されたという。こうして、京都における山中商会の支店が整備され、大正7年の株式会社化、吉郎兵衛商店合名会社化をむかえる。

5 おわりに

以上、山中商会について、従来研究対象とされてきた山中定次郎の海外進出以前の関西での活動を中心に論じてきた。

山中商会の会社としてのありかたは、江戸時代の商家のような伝統的な一族による組織づくりからはじまった。会社の方向性については、当時の各支店の店主であった吉兵衛、吉郎兵衛、興七の三人兄弟の意向によると考えられる。彼らは早くから海外での展開を視野にいれていたものの、実際に行動に移し始めたのは明治20年代と、他の業種・美術商からくらべると少し遅い時期であったといえる。しかし、その後の山中商会の海外進出と成功は、先行した業者の多くが会社を数年で廃絶せざるをえなかったことを考えると、派遣された若者が現地の商業学校に入学し、明治20年代に京都で外国人相手の商売をおこすといったそれまでの活動をいかした周到な準備によって成功したものであったのかもしれない。

山中商会がおこなったホテル内の装飾方法およびそこで飾られる品物については、他の事例を加えた検討が必要

であるが、茶道具とその飾り方に代表されるような、いわゆる日本の「古美術」と、新しい意匠や技法をとりいれ当代に生産された美術品の両方が使用されていたと思われる。なぜなら、当時の海外輸出や販売における「日本美術品」というものが伝世品をはじめとする「古美術」と、販売先の嗜好を反映した当代生産の美術品から成り立っているからである。同じように、「古美術」のなかでも近代茶人が求めた茶道具類と岡倉天心・フェノロサらによって見出された美術品という、当代の日本人が求めた「古美術」、外国人が求めた「古美術」というものが微妙にいまじり、日本の「古美術（品）」が存在する。こうした需要の違いや変化は、その時代の日本の美術に対する意識や理解のありかたを反映しているだろう。山中吉郎兵衛が、国内では茶道具商として有名でありながら、海外進出においては茶道具を前に押し出して商売をしなかった理由もここにあったと思われる。茶道は中国・朝鮮半島はじめ海外の美術品をそのなかにとりいれたが、海外では幕末以降に日本を訪れた外国人による紹介や岡倉天心『茶の本』によって理解しはじめられたというものの、それは手前などの実際的なものよりはむしろ観念的なものであった。海外からの賓客の接待に茶道が使用され、ごく少数ながら来日・滞在中に茶道を学び帰国後現地に紹介した外国人も存在したようだが、海外での茶道の積極的な紹介は戦後をまたねばならなかった⁵⁰。企業として生き残っていく上でも海外の進出における商品の選択や当代美術の扱いなど新しい方向性が必要であったのである。

今後の課題としては、山中商会の活動を林新助、池田清助ら京都の同業者による海外進出や同時期の国内での活動との比較を通し、明治から大正にかけての美術商の活動をより正確に位置づけていきたいと考えている。

〔注〕

- 1 富田昇「山中商会展観目録研究—世界篇—」『東北学院大学論集 人間・言語・情報』115号、1996年、富田昇「山中商会展観目録研究—日本篇—」『陶説』538号から543号、1998年。
- 2 門田園子「英国における日本美術コレクションの形成過程」『デザイン史学』3号、2005年、門田園子「山中商会「日光式展示室」について—明治期様式家具と室内装飾のスタイルに関する一考察—」『デザイン理論』44号、2004年、小熊佐智子「山中商会の「美術加工品」について」『芸術学研究』9号、2005年、小熊佐智子「山中商会の文化支援活動と経済活動の関わりについて」『芸術学研究』10号、2006年。
- 3 山中定次郎翁伝編纂会編、1939年、以下『定次郎伝』。
- 4 『芸術新潮』1967年1月号。
- 5 「東洋陶磁を愛した人たち（4）山中定次郎（上）」『陶説』635号、2006年、同「東洋陶磁を愛した人たち（5）山中定次郎（下）」『陶説』636号、2006年。
- 6 『大阪天満宮所蔵古文書目録』I-4・天保期、「諸願主取次名前控」内に「天満大工町山中吉兵衛」が見られる。
- 7 大阪天満宮関連の記事は「境内散歩 8 本殿前大理石の狛犬」『てんまてんじん』29号、1995年を参照。
- 8 1919年発行。
- 9 『萬象録』大正5年11月18日条、「侘び茶の奇談」（高橋箒庵『東都茶会記』1、1989年）ほか。
- 10 のち松方正義がこの軸を見せるよう請求した際、川崎は徴発されることをおそれ理由をつけて回避し、かわりに応挙の名品を献じて難をのがれたという。高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂書店、1929年、p.62。
- 11 都守淳夫編著『売立目録の書誌と全国所在一覧』勉誠出版、2001年のデータをもとにカウントした。
- 12 この図録の茶会記は写真入でありめずらしい。また、南宗書画展観一席がもうけられていることでも特徴的である。
- 13 山中春篁堂、山中吉郎兵衛編、図録3冊。住友家の協力により中国陶器の陳列、古銅器の陳列がおこなわれており、古銅器は個別のスケッチも収録されている。また昌隆社の担当としておこなわれた全25点の本邦南宗書画展観席も逸品ぞろいであった。
- 14 3冊、明治19(1886)年。
- 15 3冊、明治19(1886)年。
- 16 『日本全国諸会社役員録』（以下『役員録』）明治34(1901)年改正版の記載。なお、紙面構成の都合上、段組・改行などで資料原本の体裁に若干編集を加えている。以下同。
- 17 『明治以降京都貿易史』京都貿易協会、1963、p.265。
- 18 昭和4年版財界人物選集『日本人物情報大系36』、皓星社、2000年。
- 19 今回は大正12年(1923)版のみ確認できた。
- 20 『大阪毎日新聞』大正6年12月27日死亡記事・同日掲載の山中吉郎兵衛死亡広告より。
- 21 前出『近世道具移動史』pp162~278。

- 22 前出『近代道具市場史』p183。
- 23 大正13年10月21日『ダブルユー・ジェー・ロビンソン氏所蔵品入札』（大阪美術倶楽部）入札主催者：山中吉郎兵衛等。同氏所蔵品入札はこれを含め計3回開催。
- 24 大正12年以降の山中商会の展観の内容については前出・富田昇「山中商会展観目録研究・日本篇」に詳しい。
- 25 桑原前掲論文参照。
- 26 前出『好古堂一家言』より。
- 27 同日付京都日出新聞より。ただし『京都日出新聞』明治21年9月21日記事によると、公式には明治21年5月5日設立となるようである。資本金5万円。
- 28 『京都日出新聞』明治19年6月15日記事。『京都府勸業統計報告』第5回、1888「京都府勸業事蹟表」にはその活動について「外客ニ対シ悪品欺売ノ弊ヲ防キ兼テ新古美術商品縦覧ノ便ヲ図ルノ目的ヲ以テ有志者申合せ設置ス」（明治19年の項）とも書かれているが明治20年には「未タ粗品欺売ノ弊ヲ矯正スルニ至ラス」という状態だった。
- 29 『明治の京焼』京都府立総合資料館、1979ほか。
- 30 『明治以降京都貿易史』p71。
- 31 『明治以降京都貿易史』p75、「昭和4年版財界人物選集」『日本人物情報大系36』腥星社、2000年。
- 32 「京都府勸業事蹟表」『京都府勸業統計報告』第5回、1888、桜井敬太郎ほか合著『京都府下人物誌』第壹編、金口木舌堂、1891。
- 33 『明治以降京都貿易史』p65。
- 34 『明治以降京都貿易史』p183。
- 35 資本金20万円、従業員125名。『京都府勸業統計報告』第5回、1888年より。
- 36 資本金5万円。『京都府勸業統計報告』第5回、1888年より。
- 37 池田清助の伝記は前出『京都府下人物誌』を参照。同社は明治44年解散し、池田の所蔵品入札がおこなわれた（『美術新報』201号、「京都日出新聞」明治44年6月24日）。
- 38 「『日本美術』の市場形成」『美術商の百年』2006年。
- 39 京都市編『京都の歴史』8古都の近代、学芸書林、1975、p120。陶磁器の輸出高は明治4年に3万円程度、10年には15万円弱、13年には38万円となるがその後減少、16年には20万円ほどにおちこんでいた。
- 40 「高島屋飯田新七東店（貿易部）の設置」「貿易部独立して株式会社となる」『高島屋百年史』1941年。
- 41 ちなみに山中商会は明治20年の天皇大阪行幸啓時にも古美術品を陳列し天覧に供している。
- 42 弁天合資会社、新古繡織物並ニ製造、下京区新門前大和大路東へ入、明治31年3月設立、資本金総額10万円、払込済資本金1900円、最近利益配当1割2分、株主人員11（『京都府勸業統計報告』第16回、1898）。『京都日出新聞』明治31年7月8日記事「京都貿易商の競争（上） 京都の貿易商重に刺繡及び骨董品などを来遊の外国人に売り込み或は海外の注文に依り御売するものは其数取て多からず格別の競争もなかりき。然るに本年三月、貿易商の一と通弁中の重なる数名と也阿弥及び京都ホテルの主人等が出資に依りて資本金廿五万円の弁天合資会社なるものが新門前通小堀西入町に設立されしより表面は兎も角裏面の競争は激甚と為り、互いに反目の嫉視の姿あり。左に双方が言ふ処を記さん。（以下略）」。
- 43 書画骨董新古美術品展覧及席貸、御池通寺町東、明治41年9月設立、資本金75,000円、払込資本金19,500円。『京都府統計書』1908年より。
- 44 刺繡織物類販売、京都市古門前繩手、明治36年9月設立、資本金15,000円、資本金同払込金15,000円。『京都府統計書』、1904年より。
- 45 新古美術売買及委託販売、河原町三条上、明治41年5月設立、資本金7,000円。『京都府統計書』1908年より。
- 46 古物売買、寺町通御池上、明治42年7月設立、資本金10,000円。『京都府統計書』1909年より。
- 47 書画其他美術品売買、四条大和大路東、明治42年10月設立、資本金15,000円。『京都府統計書』1909年より。
- 48 『京都府勸業統計報告』第18回、1900年より。
- 49 『京都日出新聞』明治38年5月7日付。
- 50 熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980、pp354～361。

*本稿執筆にあたり大塚融氏、朽木ゆり子氏および山中商会より資料の提示をはじめご教示いただきました。末尾ながら之を記し深謝の意を表します。（五十音順）

Yamanaka & Company: Outline of Ventures before Overseas Activities

YAMAMOTO Masako

Abstract:

During the Meiji and Taisho Periods, Yamanaka & Company established a major presence in Europe and America as Oriental art dealers. This article discusses how the activities of the company in Japan, before it expanded overseas, laid the foundation for its ventures abroad.

When Yamanaka & Company opened a branch in the United States in 1894, they were already famous dealers in Japan of *dogu*, Japanese tea ceremony utensils. Also, before opening a branch abroad, Yamanaka & Company had already been actively courting foreign customers within Japan. In 1886, together with other dealers in art and china, they established the company, *Biko Shosha*, (Arts and Craft Trading Company) in Kyoto to sell art and craft goods to foreigners visiting Japan. In 1891, at the Tokiwa Hotel in Kyoto, in preparation for a stay by the Russian Crown Prince, they decorated a western-style room with Japanese antiques using traditional Japanese methods.

In these ventures, Yamanaka & Company discovered Westerners' preferences regarding Japanese art, knowledge which the company later used when it began to sell art in America & Europe produced by its own factories in Japan. In these activities, we can see how modernization changed the concept of "Art" in Japan.

Keywords: Yamanaka & Company, Meiji Period, Japanese art, art dealer, Kyoto